「私のイチバンボシ」第3話

水瀬真理佳

○高校・体育館

生徒がペアになってバレーボールの練習中。

桃香「それはもうプレゼントあげるしかないね！」

桃香、えまに向かって見事なサーブを披露。

えま、ボールを返せず拾いに行く。

えま「やっぱそうだよね……でも私なんかが買えるものなんてたかが知れてるし。何をあげればいいか全然分かんない！」

桃香「そう！　何でも手に入る人なんだから、逆にそんなこと気にしなくていいんだよ！田中さんのことを考えて選んだっていう気持ちが大事！」

と、ウィンクする。

えま「だとしても、迷うなぁ」

えま、桃香にボールをアンダーパスする。

桃香「たくさん悩みな！　えまが悩んだ分だ

け、きっと田中さんも喜んでくれるよ」

桃香、鋭いサーブを繰り出す。

えま、反応してアンダーで受ける。高く跳ね上がるボール。

桃香「おぉーやるぅ！」

えま「よし！」

と、ガッツポーズする。

○テレビ局・スタジオ

T『田中陽斗誕生日当日』

スタッフが収録の準備をしている。

陽斗、一人でスタジオに入って来る。

陽斗「よろしくお願いします！」

スタッフ、それぞれ「お疲れ様でーす」

「お願いします！」と返す。

陽斗、自分の席に座る。

スタッフ「あれ、みなさんまだメイクかかりますかね？」

陽斗「いや、もう来ると思うんですけど……」

陽斗、出入り口の方を気にしながら立

ち上がると、突然照明が消える。

陽斗「え？　停電？」

陽斗、暗闇の中手を伸ばして周辺を確認する。

手を叩きながら歌が聞こえてくる。

一同の声「ハッピバースデートゥーユゥー、ハッピバースデートゥーユゥー。ハッピバースデーディア陽斗～。ハッピバースデートゥユゥー！」

ろうそくの刺さったケーキが陽斗の目の前までくる。

照明がつくと同時に悠真と柊也がクラッカーを鳴らす。

一同「陽斗おめでとう！」

ユニクラウンのメンバーとスタッフが拍手。

凛太郎が両手でホールケーキを持っている。

翼、陽斗の肩に手を回す。

翼「サプライズっ！」

メンバー「大成功――！」

カメラが五人に寄る。

悠真、【ドッキリ大成功】のプラカードを持っている。

陽斗「マジか……」

と、はにかみながらみんなを見る。

陽斗「みんなありがと！　スタッフのみなさんもありがとうございます！」

翼、フォークで大きめにケーキを取り、陽斗の口元に持っていく。

陽斗、大きく口を開ける。

翼、わざと下手に食べさせる。

陽斗「おい翼！　俺の口ここだから！」

陽斗、鼻にクリームを付けた顔で自分の口元を指さす。

メンバーとスタッフの笑い声。

富澤「これ見たらねぇ、多分田中担は堪らないですよ。間違いなくヒィヒィ言いますよ、これは」

番組MC・富澤、カメラにどアップに

なって喋る。

カメラが急いで離れる。

伊達「分かってんならお前遠慮しろよ。カメラさん田中くん撮ろうとしてんだよ」

番組MC・伊達、富澤の頭を叩く。

メンバー、大爆笑。

伊達「ということで、本日のユニクラ学園、」

伊達と富澤「スタートです！」

番組収録が始まる。

○駅・改札（夕方）

同じ制服を着た学生が次々と改札に入って行く。

えま「じゃあ私はケーキ取りに行くね！　荷物よろしく！」

桃香「頼んだ！　荷物は任せて！」

桃香、キャリーケースを二つ引いてホームに向かう。

えま、桃香とは反対のホームに行く。

○同・ホーム（夕方）

えま、ホームで乗車列に並んで陽斗とのメッセージ画面を確認。

〈えま：誕生日おめでとうございます！〉

既読はついていない。

えま、送信取り消しにしようとしてやめる。

電車がホームに入って来てえまが乗り込む。

○ミラベル・店内（夕方）

えま、お渡し口へ向かう。

えま「お疲れ〜！」

勇輝「おーお疲れ！　ちょっと待って今店長に声かけるから」

えま「ありがと」

勇輝「店長！　えま来ました！」

勇輝、バックヤードに声をかける。

舞、白い箱を二つ持って出てくる。

舞「お待たせ〜！　はいこれがえまのと、あともう一つ頼まれてたやつね」

舞、箱を開けてえまに中身を見せる。

えま、笑顔になる。

えま「やっぱり店長のケーキは最高です！　ありがとうございます！」

舞「喜んでもらえて良かった！　ちょっと待ってね。保冷剤つけるから」

綾乃「ねぇ、陽斗くんって誰なの〜？　もしかして彼氏？　彼氏でしょ？」

綾乃、拗ねながらえまに絡む。

勇輝「コイツに彼氏なんているわけないじゃないですか」

えま、元気よく頷く。

綾乃「そんなの分かんないじゃん！」

勇輝「だってコイツ、アイドルしか眼中にないですもん」

綾乃「アイドル？」

えま「ユニクラウンの田中陽斗くん。私の推しです♡」

綾乃「へぇ〜。あぁっ！　そういえば、この間からちょいちょいえまがバイト終わるまで待ってる人いるよね……？」

綾乃、えまを怪しむ。

勇輝「あー！　なんか帽子被って、マスクして、芸能人みたいな人」

えま「……えーっと、誰のことだろう……？」

と、誤魔化す。

綾乃「もしかしてあれって……」

えま、ゴクリと喉を鳴らす。

綾乃、えまの肩を掴む。

綾乃「あの人が彼氏なんでしょ！」

えま、きょとんとする。

えま「（ボソッと）なんだそっちかぁ……違います。彼は親戚の人みたいな、そんな感じです」

綾乃「ホントにぃ〜？」

えま「本当です！」

綾乃「彼氏できたら絶対教えてね？　別に嫌がらせとかしないから！」

えま「もちろんですよ。安心してください。できる気配は一切ないので！」

綾乃「そんなの分かんないよ。えま可愛いんだから！」

勇輝「先輩、まだ彼氏できないんですか？もう九月も終わりますけど。大学大学入って何か月経ちましたっけ？」

綾乃「うるさい！そもそも私の周りに男が少ないの！学部も女子ばっかだし！」

勇輝「出たー。聞いてて辛い言い訳。全米が泣きますね」

勇輝、泣くフリをする。

綾乃「それが困ってる先輩にかける言葉なわけぇ!?そんなこと言うなら、誰か紹介してよ！」

勇輝「え……年下でもいいんですか!?」

と、食い気味に聞く。

綾乃「年下って言っても、勇輝の友達ならせいぜい一個下とか二個下でしょ？それくらいなら、まぁ」

勇輝「（小声で）なんだ。そうなんだ」

えまと舞、顔を見合わせてニヤニヤする。

勇輝、えまの方を見る。

勇輝「……なんだよ」

えま、ニヤニヤしながら首を横に振る。

えま「別にぃ？」

舞、にこやかに見守る。

舞「あ、お客さん来たよ」

綾乃、レジに戻る。

勇輝もドリンクの準備をする。

えま「じゃあ、私も行ってきます」

舞「うん。楽しんでおいで」

舞、手を振って見送る。

勇輝「見てくださいよ。すげぇ……どんだけ祝ってもらえんだよ田中陽斗」

勇輝、SNSのタイムラインを舞に見せる。陽斗の誕生日を祝うファンの投稿が続く。

舞「すごいみんな気合い入ってるねぇ。そう

だ、うちも載せないと！」

舞、店のアカウントで写真を投稿。

【今日誕生日のみなさん、おめでとうございます！】と打ち、【#本人不在の誕生日会】【#田中陽斗生誕祭】【#亜蘭生誕祭】とつける。

勇輝「絶対ケーキの注文増えますよ」

舞「もしそうなったらえまにボーナスあげなきゃね。『一人とか二人でも食べきれるサイズのホールケーキ作ってください』って言ってくれたおかげだし」

勇輝「そんな今日、人が足りないって言われて急遽シフト入った俺にもボーナスお願いします」

勇輝、ニコニコしながら手のひらを見せる。

舞「それは本当に助かった！　ありがとね！」

舞、勇気の手のひらにパシンと手を置いてバックヤードに戻る。

勇輝の手のひらには銀紙に包まれたチ

ョコレートが一つ乗っている。

勇輝、綾乃の方へ歩いて行く。

勇輝「先輩、口開けて。はい、あーん」

綾乃「はっ!?　あ、あーん」

綾乃が口を開けると勇輝が口にチョコレートを放り込む。

勇輝「さっきからかったお詫びです」

綾乃「全然反省してるようには見えないけどネ」

綾乃、もぐもぐと口を動かす。

勇輝「美味いですか？」

綾乃「うん！　美味しい！」

勇輝、頬を緩める。

○鮨屋・店内（夜）

カウンターのみの狭い店内。

宮本とユニクラウンのメンバー五人で貸し切り。

大将を囲むようにカウンターに座る。

後ろでは撮影スタッフがカメラを回す。

陽斗、ネタを手で掴んで口に入れる。

陽斗「んー！　うまっ！」

陽斗の幸せそうな顔がアップになる。

翼「陽斗めっちゃいい顔じゃん」

凛太郎「大将、俺もはるピーと同じの欲しいです！」

と、手を挙げる。

大将「はいよ！」

柊也「このさ、ガリも美味くね？」

悠真「分かる。ガリも握りにしてほしい」

大将「握りましょうか？」

悠真「マジですか！」

翼「大将ノリ良すぎですよ」

宮本、五人を見ながらムズムズする。

翼「さっきから社長がさ、カメラの方にいらっしゃるんだけど。喋りたくてうずうずしてんのが見えんのよ」

柊也「動画見てるみなさんはもちろん会ったことないと思うし顔も見たことないだろうから教えるとね。本当はこんな大人しくし

てられる人じゃないんですよ。こんな静かなのは奇跡！」

凛太郎「社長、好き勝手言われてますけど、どうですか？」

宮本「（掠れた声で）……喋りたい」

一同、爆笑する。

×　×　×

食事が終わって帰る準備をする。

陽斗、えまのメッセージに気づく。

（陽斗：ありがと！　何時に帰って来る？）と返信。

陽斗「あ、最後みんなで写真撮っていいですか？　ブログにあげたくて」

柊也「いいじゃん撮ろ」

宮本「俺映らないから撮るよ」

翼「社長も入りましょうよ」

陽斗「じゃあ投稿用とプライベート用二枚撮りましょ」

ユニクラウンのメンバー、大将、宮本、スタッフが壁に並ぶ。

板前がスマホを構える。

悠真「せっかくだし、タイマーにしません？」

陽斗「確かに。板前さんも入ってください」

悠真、板前からスマホを預かってタイマーをセットする。

悠真「五、四」

と、カウントしながら板前と壁に並ぶ。

全員「三、二、一！」

スマホからカシャっという音がする。

○カラオケ・えまの部屋（夜）

黒で飾りつけした部屋。

【Happy birthday】の文字が壁にかけてあり、2と6のバルーンが貼られている。

テーブルにはピザやナゲット、亜蘭のケーキ、ドリンクが並ぶ。

えまと桃香、ケーキを食べながら撮影した写真を見る。

桃香「見てよこれ。えま可愛すぎるんだけど」

えま、バルーンブーケと陽斗のうちわ

を持って笑う写真や、陽斗のアクリルスタンドを持って笑う写真。

えま「いやいや！　私が撮った桃香も超カワイイよ。ほら！」

桃香、亜蘭のケーキを持って笑っている写真。写っているテーブルの上には亜蘭のバッジが敷き詰められている。

桃香「お～なかなか盛れてるじゃん私」

えま「うん。すごく可愛い」

桃香「そういえば、田中さんにはおめでとうって言ったの？」

えま「私が起きた時にはもういなかったから直接は言えてない！　一応メッセージは送ったんだけど、さっき見た時は既読もついてなかったんだよね」

えま、メッセージを確認する。

えま「あ！　きてた！」

えま、桃香に画面を見せる。

桃香「なになに。『ありがとう。何時に帰って来る』だって！　絶対えまに祝ってもら

うの楽しみにしてるんだよ！　もうこんな時間だし早く帰ろ！　ケーキとプレゼント渡さなきゃ！」

桃香、テーブルを片づけ始める。

えま「喜んでもらえるかな……」

えま、不安そうな顔をする。

桃香「絶対大丈夫だから！」

えま、頷いて片づけをする。

○宮本家・陽斗の部屋（夜）

陽斗、ベッドに座ってスマホを見る。

〈母：誕生日おめでとう。歌にドラマに大忙しだね。体調には気をつけて、いつでも帰っておいで〉とメッセージが来ている。

陽斗、母に電話をかける。

陽斗「あ、もしもし母さん？　ごめんメッセージ返せてなくて」

母の声「きっと忙しいんだろうなと思ってたから大丈夫よ。わざわざ電話ありがとうね。

陽斗、誕生日おめでとう」

陽斗「俺の方こそ。（照れ臭そうに）生んでくれて、育ててくれてありがとう」

母の声「（笑いながら）あら。ソルトプリンスからそんなこと言ってもらえるなんて」

陽斗「なんでそれ知ってんの……」

母の声「そりゃあ、陽斗が出る番組全部みてるもん」

陽斗「（嬉しそうに）ありがと」

母の声「今日ね、葵が優くん連れて来てるの。もう寝ちゃったけどね。陽斗に会いたがってたよ。あ、ちょっと待って。葵に代わるね」

電話から姉・田中葵（30）の声。

葵の声「もしもし陽斗。誕生日おめでとー。ドラマみてるよ」

陽斗「ありがと」

葵の声「金と女と薬だけは気をつけなさいよ」

陽斗「未だに週刊誌に撮られてないの、絶対姉ちゃんの教育のおかげだよ」

葵の声「ふふっ。そうでしょ？　あ。お父さん戻って来たから代わるね」

電話「お父さん、陽斗」という声。

父の声「もしもし陽斗か？」

陽斗「うん。父さん変わりなく？」

父の声「あぁ。そういえばドラマ見てるぞ。演技はいいけど、お前はバラエティがなぁ。もっと翼くんみたいにアピールしなくて大丈夫なのか？」

陽斗「（苦笑）ハハッ。そうだね」

電話から「ちょっとそんなことはいいから。おめでとうって言った？」という葵の声。

父の声「そうだ。誕生日おめでとう」

陽斗「うん、ありがと」

父の声「……」

「ちょっと貸して」という母の声。

母の声「ごめんね陽斗。（小声で）あんなこと言ってるけど、陽斗が出る番組とか雑誌とか、お父さんが一番チェックしてるのよ」

陽斗「えぇ、そうなんだ」

母の声「じゃあそろそろ切るね。電話ありがとう。無理しすぎないのよ」

陽斗「うん、また連絡する」

陽斗、電話を切り両手を挙げてベッドに寝そべる。

玄関からドアが開く音。

陽斗、音に反応する。

○同・廊下（夜）

えま、スクールバッグを肩にかけ、両手にキャリーケースとケーキの箱を持って廊下を進む。

陽斗の部屋のドアが急に開く。

えま「わっ！」

えま、後ろに倒れそうになる。

陽斗、咄嗟にえまの背中に手を回して支える。

陽斗「おっと……おかえり」

えま「た、だいま……」

えま、瞬きしてしばらく固まってから慌てて陽斗の腕から抜ける。

陽斗「もしかして、それケーキ？」

陽斗、えまが持っている白い箱を指さす。

えま「はい」

陽斗「よっしゃ！　まだ歯磨かずに待ってた」

陽斗、くしゃっとした笑顔。

えま「（何その笑顔！　尊すぎるんですけど～）」

えま、興奮を必死に抑える。

陽斗、えまから箱を受け取って、

陽斗「荷物置いたらダイニング集合な～」

と、廊下の奥に消えていく。

○同・えまの部屋（夜）

えま、部屋に荷物を置く。

机の上にはラッピングされた箱が置いてある。

えま「（言い聞かせるように）大丈夫、陽斗く

んは優しいからきっと喜んでくれる……！」

えま、箱を持って部屋を出る。

○同・リビングダイニング（夜）

えま、プレゼントを後ろに隠しながら入る。

陽斗、テーブルの中心にケーキの箱を置き、お皿とフォークを向かい合わせに並べる。

えま「ケーキ出しますね」

陽斗「うん！」

陽斗、ワクワクしながら見つめる。

えま、箱からケーキを取り出す。

真っ白のクリームが塗られた小さな二段のシフォンケーキ。黒地のアイシングクッキーに白いチョコペンで【Happy birthday 陽斗くん】と書かれている。

上から細かく砕かれたクッキーがまぶしてある。

陽斗「すごー！　俺のカラーになってる！」

と、口元を押さえて驚いた顔。

えま、陽斗を見てホッとする。

えま「もちろんです！　陽斗くんのためのケーキなんですから！」

えま、ろうそくを差し、ライターで火をつけようとする。

えま「あれ、つかない」

えま、ライターをカチャカチャさせる。

陽斗、えまの手の上から自分の手を重ねる。

陽斗「ライターってちょっとコツがあるんだよ」

えま、ドキッとした顔。

陽斗「ここに親指置いて、気持ちゆっくり押すと……ほら、ついた」

えま「ほんとだ！　ついた！」

陽斗、ニコッと笑って手を離す。

えま「陽斗くん慣れてますね」

陽斗「前ちょっと吸ってたことあるからかな。今はもう吸ってないけど」

えま「へぇ……」

と、目を丸くする。

○（えまの妄想）同・ベランダ（夜）

陽斗が煙草を咥え、空に向かって煙を吐く。

陽斗「吸ってる時はあっち行ってろって言ったじゃん」

と、煙草を遠ざける。

○同・リビングダイニング（夜）

えま、陽斗をうっとり見つめる。

陽斗、えまの顔を覗き込む。

陽斗「あ……ごめん、こういうの言わない方が良かったか」

えま、意識が戻って、

えま「いえ！　この情報知ってるファンって私だけですよね。むしろ光栄です！」

えま、ダイニングの電気を消す。

ろうそくの火がユラユラ揺れる。

えまと陽斗、向かい合って座る。

えま、手を叩きながら、

えま「ハッピバースデートゥーユゥー。ハッピバースデートゥーユゥー。ハッピバースデーディア陽斗くーん。ハッピバースデートゥーユゥー」

陽斗、ろうそくをフッと消す。

えま「おめでとうございます！」

えま、拍手しながら電気をつける。

陽斗「ありがと」

陽斗、ケーキを切ろうとする。

陽斗「社長と美香さんの分も残しておく？」

えま「これは私たちで食べちゃいましょ！

ママは別の日にうちでも陽斗くんのお祝いするって言ってたし」

陽斗「オッケー。一応四つに切るよ」

陽斗がケーキを切り分け、えまが差し出したお皿に乗せる。

陽斗「じゃあ、いただきます」

えま、陽斗が食べるのを見つめる。

陽斗、ケーキをひと口食べて、

陽斗「めちゃくちゃ美味い！　これどこのケーキ？」

えま「良かったぁ！　これ、私のバイト先で特別に作ってもらいました！」

陽斗「ミラベルで？」

えま「はい。うちの店長元々パティシエールなので、こういうスイーツは得意分野なんです。一人とか二人で食べきれるホールケーキ作ってほしいってお願いしたら作ってくれました！」

陽斗「そうなんだ。いつもドリンクばっか頼んじゃうからなぁ。今度行った時はスイーツも食べてみる」

えま「ぜひ！」

陽斗、パクパクとケーキを食べ進める。

陽斗「あのさ。誕生日だし、気になってたこと聞いてもいい？」

えま「なんだろ。緊張する……」

陽斗「えまはさ、なんでユニクラのファンに

なってくれたの？」

えま「それ本人の前で言うのはなかなか恥ずかしいんですけど……」

陽斗「俺、今日たんじょーび！」

陽斗、自分の鼻を指さしながらえまを見つめる。

えま「それ言われたらもう話すしかないじゃないですかぁ」

えま、大きく息を吐く。

陽斗、えまを真っすぐ見る。

えま「きっかけは……」

○（えまの回想）高校・校庭（夕方）

サッカー部が練習をしている。

校庭の周りには女子が集まっている。

えま（16）と桃香（16）もフェンス越しに見つめる。

工藤真斗（17）がゴールを決める。

女子の黄色い声援が上がる。

えま「先輩ナイスー！」

工藤、えまの声に気づいてえまの方に歩いてくる。

工藤「えまちゃん来てくれたんだ」

えま「お疲れ様です！　先輩カッコ良かったです！」

工藤「えまちゃんに言われると嬉しいな。あのさ、良かったら今日」

部員の声「おーい真斗！　集合だってー！」

工藤が何か言いかけたところで部員に呼ばれる。

工藤「ごめん行かなきゃ。またね！」

えま「はい！　頑張ってください！」

工藤、走って行く。

えま、工藤の背中を見つめる。

桃香、えまを肘でつつく。

桃香「絶対脈アリだって！　こんなに女子がたくさんいるのに、わざわざえまの方に来たんだよ？　間違いないって！」

えま「たまたまかもしれないじゃーん」

桃香「告白しちゃいなよ！」

えま「え～!?」

○（えまの回想）同・校舎裏

えまと工藤が向き合う。

えま、呼吸を整えて、

えま「真斗先輩が好きです！　良かったら付き合ってください！」

えま、目をギュッと瞑る。

工藤「あ～カッコ悪いな……俺から言うつもりだったのに」

えま「え……？」

と、顔を上げる。

工藤「俺もえまちゃんのこと好きだよ。俺と付き合ってください」

工藤、手を差し出す。

えま、パッと顔が明るくなる。

えま「あの……恥ずかしながら私付き合うとか初めてで……」

工藤「そうなんだ。俺を初めての彼氏にしてくれてありがとう。大事にする」

と、えまの手を握る。

えま、照れながら頷く。

○（えまの回想）駅・改札

えま、改札の方を見る。

えま「先輩……何かあったのかな？」

えま、スマホを見るが連絡はない。

工藤、えまの後ろから近づいてえまの目元を手で隠す。

えま「わっ……！」

工藤「だーれだ？」

えま、口角を上げる。

えま「えー誰だろー？」

えま、工藤の手を触る。

工藤、手を離してえまの顔を覗き込む。

工藤「ごめん、お待たせ」

えま「先輩遅刻したから、今日はずっと手繋いでもらいますからね？」

えま、上目遣いで工藤を見る。

工藤「それ全然罰になってないけど大丈夫？」

工藤、えまの手を引いて柱の後ろに回る。

人が行き交う中、工藤がえまの唇にキス。イチャイチャする二人。

○（えまの回想）高校・門

学園祭の立て看板。

保護者や他校の制服の生徒が入って行く。

○（えまの回想）同・教室の外

【執事喫茶】と書かれた立て看板。

○（えまの回想）同・教室の中

えまと桃香、教室の中に入る。

女子「いらっしゃいませ。何名様でしょうか？」

えま「二人です」

女子「二名様入りまーす！」

執事やメイドの恰好をした生徒が迎え

る。

男子「いらっしゃいませ！」

えまと桃香、二人がけの席に座る。

えま、キョロキョロと教室内を見渡す。

桃香「先輩いないね」

えま「うん。この時間お店いるって言ってたんだけどな……」

黒いカーテンで仕切られたバックヤードから話し声が聞こえる。

女子の声「ねぇいいの？　彼女いるんでしょ？」

工藤の声「まぁ、一応？」

えま、カーテンの方を振り向く。

女子の声「（笑いながら）何それー」

工藤の声「可愛いんだけどさ、なんか思ってたより子供っぽかったというか。彼女ってか妹にしか見えないんだよね」

女子の声「ウケる。まぁ一年生だから仕方ないんじゃない？　だったら早く別れてあげなよ。可哀想～」

えま、カーテンの方へ行き勢いよくカーテンを開ける。

中には工藤とその膝の上に座っている女子の姿。

教室内全員の視線が集まる。

生徒「（小声で）あれって二年のサッカー部の先輩だよね？」

生徒「（小声で）うん。一年と付き合ってるって聞いたけど……」

生徒「相手の女、三年の先輩だよね？」

生徒、スマホで写真や動画を撮り始める。

工藤と女子、慌てて離れる。

工藤「えま、これは違う」

工藤、えまに手を伸ばす。

えま、目に涙を浮かべて教室を飛び出す。

工藤「えま、待てって！」

桃香「もう二度とえまに関わらないでください！」

桃香、工藤に言い放ってえまを追いかける。

○（えまの回想）宮本家・リビングダイニング（夜）

宮本、テーブルでごはんを食べる。

宮本「えまは？」

美香「家にいる時はずっと部屋に籠りきり。お腹もすかないって言って全然食べないの」

美香、心配そうに言う。

宮本「俺のカワイイ娘を傷つけるなんて許せないな。大体、彼氏ができたなんて俺は聞いてない！」

美香「あら！　言ってなかった？」

宮本「聞いてないよ！」

宮本、目を細めて美香を見る。

美香「ごめんごめん」

美香、一人分の料理をよそってラップをかける。

○（えまの回想）同・えまの部屋（夜）

えま、ベッドの上で体育座りをして膝に顔を埋める。

スマホの通知音が鳴り、メッセージを確認する。

〈桃香：これめっちゃ笑えるよ！〉と、動画サイトのURLが送られてくる。

えま、URLを開いて動画を見る。

芸人の漫才動画。

ボケ「オカンがな、最近アイドルにハマってんねん。でもさっきからそのアイドルの名前が思い出せんのよ」

ツッコミ「俺アイドル詳しいよ。なんか特徴言うてみ」

ボケ「最近ものすごく人気で、グループメンバーが五人いるらしいねん」

ツッコミ「それユニクラウンやないか。今人気で、五人組のアイドルって言ったらユニクランしかおらんやろ」

ボケ「俺もそう思ってんけどな」

ツッコミ「そうやろぉ？」

ボケ「おかんが言うにはな、メンバーの仲が最悪らしいねん」

ツッコミ「あーほなユニクラウンとちゃうかぁ。ユニクラウンはな、メンバー仲が良すぎるって有名なんよ。地方とか行った時も、一人ずつホテルの部屋があるのにな、結局誰かの部屋に集まって、ギュウギュウのベッドで寝る。ほな、これユニクラウンとちゃうよ。もうちょっと詳しく教えてくれる？」

えま、真顔で見続ける。

×　×　×

ツッコミ「それやっぱりユニクラウンやないか！　どうも、ありがとうございました！」

えま、フフッと笑う。

ネットで【ユニクラウン】と検索する。

デビュー曲のPVを見始める。

×　×　×

真っ暗な部屋。

スマホの時計は1：30の表示。

えま、ユニクラウンの動画を見続ける。

○（えまの回想）同・リビングダイニング

（朝）

美香、朝食の用意をしている。

走ってくる足音と共にえまが飛び込んでくる。

えま「ママ！」

美香、驚いてえまを見る。

美香「おはよう。どうしたのそんな慌てて」

えま「私ユニクラウンのファンクラブ入りたい！」

美香「急にどうしたの？」

えま「なんとなく動画見始めたらもう止まらなくて！　ねぇ、いいでしょ？」

えま、生き生きと話す。

美香、優しく微笑む。

美香「いいじゃない！」

えま「それでね、グッズとかコンサート代とか、自分のお金で払いたいからバイトしていい？」

美香「えー？」

えま「お願いお願い！」

えま、顔の前で手を合わせる。

美香「……分かった。でも勉強が優先よ？成績が落ちたらナシだからね？」

えま「うん！　ありがとう！」

美香、ホッとする。

美香「ちなみに、誰が一番好きなの？」

えま「このね、田中陽斗くんって人なんだけど」

えま、美香に田中の写真を見せる。

美香「んー！　ママも陽斗くん好きよ！」

えま「え？　ママユニクラウン知ってたの？」

えま、不思議そうに美香を見る。

美香「あ……だってほら、すごく人気のグループでしょ？　ママだって知ってるわよ」

えま「そっかそうだよね！　コンサート当た

ったらママも行く？」

美香「うん、行きたいな～」

○えまの家・リビングダイニング（夜）

えま「とまぁ、そんなわけです」

えま、話し終わってケーキをひと口食べる。

陽斗「それにしても酷いなその先輩……でもそのお陰でえまがユニクラを知ってくれたわけだから、ある意味感謝なのかな」

えま「最低ですよね!?　だから今年の文化祭は絶対先輩よりもカッコよくて最高の彼氏と一緒に回って、先輩を見返すって決めてるんです！　まぁ先輩からしたら、もう私なんてどうでもいいかもしれないですけど……」

陽斗「いいじゃん見せつけてやんなよ。それで、肝心のカッコいい最高の彼氏はいるわけ？」

えま「問題はそこなんです！　田中担になっ

てからというもの、他の男性に全然ときめかないんです！　例えばイケメンが歩いても、『整った顔だなぁ。でも陽斗くんの方がカッコいい』って思っちゃうし、優しくされても『優しい人なんだなぁ。でも陽斗くんほどじゃないけど』ってなっちゃうんです。やっぱりアイドルオタクになると恋愛できなくなるって噂は本当だったんですね……」

えま、テーブルに項垂れる。

陽斗「ユニクラ好きになってくれた理由は分かったけど、その中でもどうして田中陽斗なのかも聞きたい」

えま「いくら誕生日でも、本人に直接言うのはムリです！　本人に言うのは恥ずかしいっていうか……」

陽斗「アイドルの田中陽斗と、この家にいる田中陽斗は別人だって最初に会った時えま言ってたじゃん」

と、勝ち誇った顔でえまを見る。

えま、言葉に詰まる。

えま「……それはやっぱり、ダンス上手で歌も上手くて、何よりカッコいいですし……」

と、呟く。

陽斗「そうだ。えまは俺の顔と体と声だけが好きなんだったね」

と、笑う。

えま「それはあの時陽斗くんに安心してもらうために言っただけで……！　本当はそれだけじゃないですもん！」

陽斗「じゃあ本当は？」

えま「……陽斗くんは、他のメンバーと違って甘い言葉とかもなかなか言ってくれなくて、人見知りもあるから雑誌とかテレビではソルトプリンスなんて言われることが多くて」

陽斗「え、もしかして悪口？」

と、ニヤニヤする。

えま、笑いながら首を横に振る。

えま「……でも、実はブログの更新率はグル

ープで一番で。言葉にはあまり出さないけど、ファンのこと大切に思ってくれてるのが行動で分かるんです」

陽斗、照れ臭そうに目を泳がせる。

えま「それはメンバーとかスタッフさんに対しても同じで、とにかく気遣いの鬼。それくらい自分のことも優しくしてって思うのに、自分にはすごくストイック。基本何でも器用にこなせるけどちょっと天然だったり」

陽斗、苦笑する。

えま「そんな魅力的なところがたくさんあるのに、絶対に天狗にならないところとか。アイドルとかそれ以前に、人として尊敬してて、見習いたいところがたくさんあるんです。何よりもステージに立ってる姿が本当にキラキラしてて、アイドルを楽しんでるのが伝わってくるから。だから私は陽斗くんを好きになりました！　あとそれから」

えま、続けようとするが陽斗が遮る。

陽斗「待って、ストップ。ありがとう、もう大丈夫だから！」

と、手で口元を隠して視線を逸らす。

えま、悪戯っ子のような笑顔で、

えま「陽斗くんが聞きたいって言ったんですからね？　まだまだありますよ～」

と、陽斗の顔を覗き込んで続けようとする。

陽斗「マジで今ダメだから！」

と、えまに顔を見られないようにする。

えま「そうだ！　忘れないうちにこれ渡しちゃいますね！」

えま、椅子の上の箱を陽斗に差し出す。

えま「改めて、誕生日おめでとうございます！」

陽斗「これ俺に……？　開けていい？」

えま、頷く。

えま「ほんっっとうに大したものじゃないので！」

陽斗、包装紙を外して箱の蓋を開ける。

陽斗「え、これTシャツ？」

箱の中にはオシャレなロゴマークのTシャツ。

えま「はい……部屋着でもライブリハとかでも使えるかなと思って……」

陽斗「俺ちょうどこういうオシャレTシャツ欲しかったんだよ！」

えま「でももし好みと合わなかったら切って雑巾とかにしてもらって全然大丈夫なので！」

陽斗「（笑いながら）雑巾なんかにしないよ勿体ない！」

陽斗、Tシャツを広げる。

陽斗「ごめん。ちょっと驚きすぎてうまく言葉が出てこないんだけど。今めちゃくちゃ喜んでるから！　ありがとう。大事に、たくさん着させてもらう」

えま、照れ臭そうに笑う。

陽斗、丁寧にTシャツを箱に戻す。

陽斗「ケーキもう一個食べていい？」

えま「もちろんです！　陽斗くんのケーキなので！」

陽斗、自分のお皿とえまのお皿に残りのケーキを乗せる。

えま「えー！　私こんな時間に二個目はヤバいです！」

陽斗「大丈夫大丈夫。俺もライブに向けて体作んなきゃだけど。今日は特別」

陽斗、「いただきまーす」と美味しそうにケーキを頬張る。

えま「ですね！」

と、えまもケーキを頬張る。

○同・洗面所（夜）

えま、スマホを見ながら髪の毛を乾かす。

ブログ更新のメールが届く。

えま、ドライヤーを止めてブログを確認する。

えま「陽斗くん更新してくれてる！」

【夜遅くにごめん】というタイトルの記事。

えま、読み上げる。

えま「9月30日。気づいたらこんな時間になってました」

○同・陽斗の部屋（夜）

陽斗、ベッドに座ってスマホでブログを書く。

陽斗M「まずは、今日誕生日のみなさん、おめでとう！　ついでに俺も（笑）仕事の合間に朝からSNS見てます。見ても見ても追いつかない。これ、リアルに全部見終わるの来年までかかりそう（笑）メッセージとか、ケーキにデザートプレート、バルーン、花。他にもたくさん。プレゼントを買ってくれた人もたくさんいて。もうね、そうやって俺のことを考えてくれたっていうそのことが有難いし、嬉しいです。みんな、たくさんの愛をありがとう。こんなの面と

向かっては絶対言えないからここで（笑）

26歳の田中陽斗、そしてユニクラウンをこれからもよろしくお願いします。写真は社長に連れてってもらった鮨屋で撮ったやつ。みんなに祝ってもらいました。P・S・ライブに向けて絶賛準備中です。来てくれる人、どうかお楽しみに。そして今回来れない人、次は絶対会いに行くから、それまで絶対浮気すんなよ？」

○同・洗面所（夜）

えま、濡れた髪のままブログを読んでいる。

ブログの最後には鮨屋で撮ったユニクラウンのメンバー写真が貼られている。

えま「これだから田中担はやめられないっ！」

と、ピョンピョン跳ねる。

○同・陽斗の部屋（夜）

陽斗、満足そうにブログを見る。

陽斗「ケーキといい、プレゼントといい……

たくさんもらっちゃったな」

陽斗、えまからもらったTシャツを嬉しそうに触る。

（了）